② 記録をとる意義

記録は子どもの現在の状況や教師の働きかけ、他に考えられる働きかけの可能性、子どものその時々の行動の移り変わりをとらえられるものでなければならないので、子どもの変化（状況の受け止め方）と教師の働きかけの関係を連続した形で分かるような記録が必要となる。そうすることによって、子どものみならず、教師としての子どもへのかかわり方がどうであったかを検討することができ、教師自身の資質の向上を図っていくことができる。

③ 行動記録表（試案）の作成

子どもの行動と教師のかかわり方を省察するためには、子どもの状態を測るための基準となる尺度が必要となる。次はその尺度の条件となるものである。

ア、子どものすべての行動がカバーできること。子どもの障害の種類・程度、年齢、様々な活動などを越えて、一つの尺度で見ることができるもの。

イ、状況の変化へ子どもが対処している段階を、適切に判断できる尺度であること。つまり、子どもが置かれた状況の変化に積極的に対処しようとしている状態なのか、反対に、置かれた状況から逃避しようとしたり、どうしたらよいかと迷っている状態なのかが判断できるものであること。

ウ、子どもの行動の様子から、教師のかかわり方の適否をも判断する資料となり得ること。

このことを踏まえて、三段階五レベルの尺度（資料1）を設定し、教師のかかわりと子どもの行動を対比して記述し、子どもの行動のレベルが分かるような行動記録表の試案を作成した。

④ VTR記録の有効性

子どもの行動を分析するためには、行動を詳細かつ正確に記録することが必要である。筆記のみや音声のみの記録では、行動の見落としが生じるおそれがある。また、実践の後の省察において子どもの行動のもつ意味を的確にとらえるためにも、繰り返し検討を加えることができるVTRによる記録が適している。

資料2・3はこのVTRを基にした行動記録表への記入手順と記入例である。

四、第三年次の研究（平成二年度）

三年次である本年度は、この行動記録表（試案）の有効性や妥当性について更に検討を加え、そのうえで事例への適用を数多く重ね、望ましい行動記録表を作成することによって心身に障害がある子どもの実態把握と指導援助に関するよりよい視点と方法が提示できるよう努力していくことにしている。

資料1 子どもの状態を測るための3段階5レベルの尺度

【第1段階】

自分を取り巻く状況の変化に対して、すでに身に付けている方法や、まったく新しい方法（基準は子ども自身）で適切に対処しようとする段階。子どもの対処の仕方によって更に3つのレベルに分類する。

レベル①〔創造〕
（例）「高い所に自分の大事にしている玩具があるが、手が届かないので取って遊ぶことができずに泣いていた子どもが、ふと囲りに目をやり、椅子があるのを見てじっと見つめ、やがて椅子を持ち出してその上に立ち、はじめて椅子を踏み台にして玩具を手に入れたような行動」

レベル②〔応用〕
（例）「レベル①の様な経験をした後で、今度は椅子がないので困っていた子どもが、側に教師がいるのを見て、『オンブ』と言って教師の背中に乗って玩具を手に入れようとするような行動」

レベル③〔適用〕
（例）「毎朝、いつものとおり登校して、だれの指示も受けないのに迷わずに自分の教室に行ったり、運動服などに着替えたりして教師を待っているような行動」
子どもの心理状態が安定しているときや、周りの状況の変化が少ないときに起こりやすい。

【第2段階】

自分を取り巻く状況の変化に適切に対処しきれないときに、受けるダメージを少なくしようとする状態で、心の平静さを保持しようとしたり、再び高いレベルの行動に立ち向かおうとしたりして、心の準備をする段階。

レベル④
（例）「机上の勉強に飽きたときに、少し席を離れて散歩をすると、また頑張れるような行動」

【第3段階】

自分を取り巻く状況の急激な変化に対処しきれずに、パニックになったり、閉じこもったりして、周りからの働きかけを受けつけにくくなる段階。

レベル⑤
（例）「好きなトランポリンで遊んでいたのに、無理やり教師にそれを止めさせられたとき、自分の頭を強くたたいたり、自分や相手の手などをかんだりするような行動」

資料2 行動記録表への記入手順

① VTRから子どもの連続している同じ行動のまとまりを一つの単位として切り取り、発現順に「子どもの行動」の欄に記入する。
② 切り取った単位ごとに教師がどのようにかかわっているかを、具体的に「教師のかかわり」の欄に記入する。
③ 子どもの行動について、行動のレベルの基準にしたがって分析し「行動のレベル」の欄にプロットし、変化を分かり易くするためにそれらを線で結び付ける。
④ 周りの状況など子どもの行動や教師のかかわりに影響を及ぼすと思われるものがあれば備考欄(欄外)に記入する。
※ 行動の分析に当たっては、行動の文脈に沿って行うことが大事である。同じ行動でも、十分楽しみながら行っている場合と、状況の変化のショックを和らげるために行う行動では行動のレベルが違うものと解釈する。

資料3 行動記録表の記入例

行動記録表 観察日：平成元年○月○日 対象児：〔　　〕 観察者：〔　　〕 No

	行動のレベル I ①	②	③	II ④	III ⑤	具体的な行動 子どもの行動	教師のかかわり
1						トランポリンの上に立っている。Tの周りをひと回りする。	Cの動きを見ている。
2						Tに近より抱っこをせがむようなしぐさをする。（両腕を上にあげながら）	Cのしぐさを見て抱き上げ、10回ほどジャンプする。Cを降ろす。
3						自分で数回ジャンプしたあと、すべり台の方に行くが思い直したように階段に行く（何か調べるようなしぐさ）	Tは下へ降りる。
4						再びトランポリンに戻る。Tを探す。一人でジャンプしているうち、Tを見つける。	「いたいた」と声を掛ける。
5						Tに近寄り、5回ほどジャンプをするが、だんだんと離れて行く。（ジャンプしながら）	Cのジャンプに合わせ、「1.2.3……」と数える。
6						途中「アエ　アエ」というような声を出しながらジャンプする。	